【詩集】枯れすすき

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【詩集】枯れすすき

【Ｎコード】
Ｎ７３５６Ｘ

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】
布袋しぐれの徒然なる詩集、第一弾。

『枯れすすき』

私の生まれの季語から頂いたタイトル。

広がる、私の世界。

ひとりぼっち

憎らしい　あの眼（まなこ）
お前は　今　何を思っているのか

恨めしい　あの声援
私には　背を押す人も少ないというのに

憎らしさも　恨めしさも　底から沸々湧き出でて
心の中を支配していく
可笑しくなっていく
微塵も人間らしさが残らずに
やがて修羅にでもなりそうに

心が操れないのに　どうして他人を分かろうか
自分すらコントロールできないのに
どうやって　人を戒められようか

君の引いたラインの数だけ
答えが導けるものならば
救われるというのに
私はただ　心の内で思うのだ

たったひとり
たったひとりで

根こそぎ

何も残らない
このままでは
何もいえない
この状態では
抗うことすら
できないのなら
いっそう　恨めればいいのに
いっそう　消えてしまえたらいいのに
暗い思いは
根こそぎ　拭えない

何も言われない
このままでも
何も送られない
声すらも
愛されないのなら
痛いままなら
いっそう　孤独でいい
いっそう　ひとりでいい
寂しい思いは
すっぽり抜けてしまえたらいいのに

根こそぎ拭えないなら
引っこ抜けないなら
葬り去りたい
この気持ち

根こそぎ拭いたくっても
愛されたい気持ちは
きっと残るから
根こそぎ拭えないのか

満たされる

君の贈るプレゼント
君の送る言葉
君のささやく声に
私は　いつも満たされて

微笑む君は　まるで
天使みたいだと
知れば知るほど
気付かされる
感じる　深い慈愛を
君はまるで『アフロディーテー』の生まれ変わりのよう

純真なる
無垢なる
美しい愛の心を
携えた　君

清らかな
君の心は
君の姿に現されて

争うことを忌避する　君
そんな君を

私は尊敬する

君は輝いて
希望に満たされた未来を突き進む

私は君の優しさに
触れられた瞬間
包まれた瞬間
いっぱいに満たされて
幸せになる

ねがいごと

あなたの問いに答えられない
なんと答えていいのか分からない

あの人が生きていた頃
表面上は幸せだった
そういうあなた

あの人が死んだ今
皆がバラバラで不幸せだ
そういうあなた

私はこの自由が嬉しくて仕方ないのに
あなたはどうしてそういうの

この家に
団結なんてもの
初めから
私の生まれたときから
存在していなかったじゃない
私は団結することを知らないまま
１７を迎えました
そして
１８になろうとしています

あなたの疑問に答えられない
どう答えたら満点か分からない

私自身がやると何でも上手くいって
あなた自身がやると上手くいかないから不満だろう
そういうあなた

そうして数時間後
けろっとして

親の心は分からない
子供の心は分からない
私はあなたを理解してないし
理解しようとは思わない

あの家で
感情を押し殺して生きていかないと
耐えられなかった

『働いてからモノを言え』
そう押さえつける人と
『あんたには情はないの』
そう責め立てるあなたに
囲まれて
息苦しい十代も終わりかけ

私に残された最後の仕事が終われば
きっと自由だ

早く適当に結婚して
適当に子供を産んで

できることならば
美しいうちに
この命を絶ってしまいたい

もう何も分からなくなってしまったから

朝

寝心地のいい朝
ぼうっと目を開く
障子の隙間から
漏れ出る光が
温かく　差し込んで
誰かの優しい　腕のよう

そうして朝を
ゆっくり迎えたのも
もう
何年も前の話
今や叶わぬ
夢の話

木漏れ陽の差すころ
目を開けて
起きることも
叶わぬ
時代は流れ
時間に追われ
ゆっくりと朝を迎えることも
今や叶わぬ
夢の話

夜の明かりを
早く消して
月に顔
照らされながら
早く　眠りについて

深い眠りの淵
明日の憂いも無しに
目覚めの喜びだけを
心に留めて

そうして
迎えたい
心地の良い
朝を

ひびく

じん　とくる
雨みたいに
心の中に広がる
白い波紋
それはまるで
産声のように
あたりを　揺らし

ぽつん
たったひとつ
揺らぐことなく
そこにある
存在感だけ
はっきりと
まるで木のように
呼吸して

深呼吸
繰り返すたび
あたりに気が満ちる
満ちる　満ちていっぱいになって
やがて大気（たいき）に溶け込んで

ほう　ほう　ほう

温かな
鳥の鳴き声のように
ふう　ふう　ふう
小さな息吹で
両手を満たして
そうしてやがて
来(きた)るべき
春を待つ
優しい
春を待つ

しんしんと
響く音に
耳を澄まして

温かな春を待ち望む

入れ替わり

ポジションは変更
あなたの位置はきっといただいた

学生時代
スポーツ万能
皆にモテモテの君

学生時代
くだらない下ネタ
武勇伝振りまいて
注目された君

もうそんな人気者は廃れていくんだ
学生時代限りの人気者よ
グッバイ
私の時代がくるの

嘘ばかりつかないで
あなたより優れた頭
あなたより優れた声
二流でも
受けるはずよ
私の芸

歌もダンスも
誰にも負けない
二流の世界
それはまだ独学の爪あとを残したままだから

諦めないわ
私はホットアイコン
生まれたニュースター
ヘイ　タッチ
あなたとポジション交代

私が今こそ
輝くスター

ある月の末

妙に温かな冬
ジョギングすると
汗をかいた
もう二ヵ月後には
クリスマスというのに

嘘みたいに温かな冬
冬の季語に
小春日和とあるけれど
これは小春日和ではなくって
どういうのだろう
あれは冬の季語だから

ごちゃごちゃの四季
温かな冬に
秋と冬の間
生温かく
優しい眠気を誘う

妙な温かさは
妙な食欲も
誘い込む
一番　きっと野生の目覚める時期

フワフワする感覚
ウキウキする感覚
満たされていくみたい
優しい陽射しに

まだこない
厳しい冬を
心のどこかで
待ちわびていたりするんだ

嗜好品

キレイなグラスに　ひとしずく
落としてしまえ
紅(くれない)の液

黒く黒ずんだ
紅(くれない)じゃなくて
鮮やかな
紅(くれない)
美しいそれを　ひとしずく垂らしてしまって

切り口は　垂れる紅(くれない)で満たされて
生温かい　紅(くれない)が包む
その体は
抱きしめたくなるほど
とても愛らしい

垂らした紅(くれない)
そのまま指にからめて
ぬめりのある輝きは
丁度いいわ
この世の興奮剤
憂鬱
私の気分も満たされていくよう

良い匂い
鉄の生々しい匂い
本能にえずく
その匂いがすき

誰か満たしてくれない
私に
私の嗜好品を
ちょうだい

上を見る

いつまでそのままなんだろう
廃れた流行をまとう
本当は嘘で塗り固められた　あなたたち
温かくない言葉を吐いて
冗談みたいな食事をする
見ていて面白いけれど
一体　どうするつもりなの
画面の中の永遠のプリンセスじゃないのに
今のあなた
未来は醜い

嫉妬ではない
言い切れる自信は　薄っぺらいけれど
少なくともあなたには　憧れていない

どんなに見下されていたとしても
少なくともあなたよりは馬鹿じゃない
踏んずけられた私のプライド
ズタズタだけれど
まだ残っている自尊心
私は嘘で塗り固められてなんかいない
あなたよりは

まだ走れる
私はまだ
未来の私はきっと　美しい

唯我独裁

私の出番よ　あなたは引込んで
私の舵取り　思うがまま
あなたの思い通りには　もうできない

私が日を浴びるとき　あなたは日陰で見ていて
私が少し動けば　黄色い声が上がる
あなたはもう英雄なんかじゃない

私が自信を持つと　あなたは気持ち悪いと
構わないわ　侮辱されても
私はこれから勝ち組人生まっしぐら

チームワークとか　そんなものにはさよなら
誰があなたについて行きますか
あなたはもう目立たない人間

今から私のいうとおりに
私が先頭に立つから
ついてきて　このまま
私は私の色でいくわ　覚悟して

日陰のあなたもついてらっしゃい

私だって　義理であなたに従ったんだから

枯れすすき

風に翻弄される
ひょろっとした
侘しい
そんな草じゃない
まして雑草なんかじゃない

日の落つるころ
夕日の照らす
幻想的なそれは
まさしく草なんかじゃなくて
大自然の源から
生れ落ちた
優しい　子供

雨に打たれっぱなしの
弱っちい
頼りない
そんな草じゃない
まして雑草なんかじゃない

日の昇るころ
朝日とともに
輝き漏れ出すそれは
まさしく草なんかじゃなくて

地球を揺れ動かす
大きな世界の
玄人のよう

顔をお上げ
お前は枯れていても
顔をお上げ
お前は風に吹かれっぱなしでいても
唯一無二
お前の存在は代えられない

お前を趣(おもむき)と
人が呼ぶように

女神

この世に命を授かった　その瞬間から
あなたは輝く女神
誰にも汚されやしない
あなたは輝く女神
愛の司る
神々の愛した曲線は
あなたのその美しい四肢に

今が卑屈ならば　諦めないで
あなたは女神だから
自らその扉を開けてみて
あなたは女神だから
重くても　力を込めて
運命の鍵はあなたに預けてる
神々の戯(たわむ)れ
あなたを今　見ているわ

輝き放てる　その内側から
あなたは生まれたときから女神の化身
愛を司るその両手で　包んでみて
あなたは生まれたときから女神の化身
この暗い世の中　あなたの愛で満たしてよ
両手を開けて
胸から溢れるその愛で
この世を今　浄化してよ

あなたは紛れもない
女神の化身
美しいその曲線
神々たちの戯(たわむ)れによって　作られた
唯一無二の
美しい幻の神

包まって

毛布に包まって
ほうって
コーヒーに口つける
甘ったるいコーヒー
ちょっと寒い外と正反対に
優しすぎるくらいで
丁度良い

布団から出て
ふうっと
コンソメスープに口つける
温かいスープ
起きたての寝ぼけた身体に
よくしみわたって
丁度良い

包まって
そこから出たら
ぼっとまともな
現実の世界
温かくない
ちょっとこれから
厳しくなる寒さが
少し
寂しい

だれも抱きしめてくれない
だれも抱きしめられない
厳しいこの世だから

今だけでも
包まっておこうか

両手

俺より　手が荒れていると
言う　君
そう言って君は　私の手に驚く
ハンドクリームを塗っても仕方のないくらい荒れた手に
ハンドクリームを塗りなよ
そう言う　君

俺より　手が冷たいと
言う　君
私の両手を包み込んで
じんわりと温めてくれた
それでもすぐ冷える手に
君は驚いた

太ることを気にしている私に
冬なんだから
うさぎみたいに　丸くなっとけばいい
そういう君

すぐに冷える手を
心配して　ずっと温めてくれる
温かい　君
そういう君

ちょっと猫背な残念な背中

私の今の理想の人

恋はうつろいやすいから

最近　彼とうまくいってないの
そう零すと
可哀想に
そう零す　君

ねえ　それはどっちに対してだったの
言葉が足りているのに
覚えてくれているのに
それだけ
足りなかったよ

だからあなたに恋したんだと思う

包み込まれた
両手からはじまった
優しい　恋

冷たい一番星

出会った頃
気さくな
かっこいい　人だと思った
あなたは
とてもクールな　大人の人
今までに出会ったことのない
かっこいい　男だと思った

私の周りに
女子が増えた頃
知らぬ間に　あなたは
冷たくなった
私は　寂しがりやだから
冷たくされると　パニックになる
どうしていいのか分からなくなる

ねえ　先輩　ねえ何かしましたか
夢にまで見る　あなたのこと
私の身の回り
また女子が欠けていく
男子ばっかりになっていく
競争相手が少ない私
まだ　弱っちい生まれたての星くず

いつか輝くことを夢見て
好成績をおさめる
あなたに　憧れている

ねえ　先輩　ねえまだ教えてほしいことも
いっぱいあるの　これからなの
まだ頑張って
強くなるから
ねえ　お願いだから
そんなに冷たくしないで

輝く一番星に憧れる
生まれたての星くずは
希望を失っては
永遠に輝けない

冷たい一番星（後書き）

変わってしまった、先輩のことを書きました。
ちょっと最近、冷たくって
ホントに、寂しい・・

気分じゃない

食べたい気分じゃない
胸焼けして

踊りたい気分じゃない
体がだるくて

描きたい気分じゃない
なんだか何も思い浮かばなくて

出かけたい気分じゃない
あんまり気も進まなくって

人に会いたい気分じゃない
今日はとても太って見えるから

そうやって言い訳して
自分に正直にしてみるけれど
そうしたところで満たされる物って
かなり少ない

自分に正直だと

周りは我がままだという
それは　我がままだと
周りに正直だと
皆は優しい子だという
それは　優しさだと

ひねくれた心は
どんどん　ひねくれて
加速していく

これは違うよって

気分じゃないんだ
皆に優しくできる

ぐるぐる

ぐるぐる　回って
その業　自らに
戻ってくる

好きだって言っても
嫌いだと言っても
あの子　憎いと言っても
全て　それは回ってくる
返ってくる

錯覚かもしれない
そう思いたい心はどこかにある
あの子が嫌いだけれど
あの子に嫌われていると知っていたけれど
あなたがそう　言っていると
実際は　とてもショックを受けるもの

ぐるぐる回って
その業　自らに
回ってくる
戻ってくる

まるでそれは

当たり前のように

決まりごとのように
私に戻ってくる

これを身から出たサビというのでしょうね
ぐるぐる
回る
この業

ゴシップ

目立つほうじゃないのに
あなたの噂する人は
私

クラスで影になるような
目立つ人についていくような
そんな存在だったけれど

いいじゃない
少しくらい
そうよ　新鮮味があるでしょう
私が媚を売って
私が先生たち
男子に付けこんでいくのも
新鮮味って大切なの

あなたたちがやらないなら
私がやるわ

人生って開拓していかなくっちゃ
どうにもならないもの

高校のクラスメートなんて
どうせすぐ
忘れちゃう
仲良い友人は一生でも
クラスメートなんて一瞬
仲間じゃないわ
あなたなんて
ただのいい　踏み切り台でしかない

人生は進んでいかなくっちゃ
誰も後押ししてくれないから

太ってるって
言えた義理じゃないでしょ
あなたのものさしなんかで　計らないで頂戴
気違いに計られてちゃ　気分悪い

持ち上げて
褒めて
讃えて
そういうの大好き

ひざまずいて
敬って
そうして微笑んで
そういう人が好き

捨て駒
いらない人間
影
目立たない
私はもう　そんなジャンルじゃない

禁句はないわ
何だって書けばいい
私はゴシップ好きの
良い女

乙女心

憧れは　いつくになっても
存在する
それが幼稚だったり
妙に大人びていたり
現実味をおびていたり
また妄想じみていたり
それって人それぞれだけれど
確かに
憧れは　いくつになっても
存在する

優しくない
素っ気無い
一番星
いつからだろう
気になり始めたのは
あなたの隣
いつも誰かが居た
いつもひとりだった
どっちかしかない
当たり前だけれど
笑っている横顔を見るたびに
胸が痛くなった

好きな人がいるはずだけれど

好きな人に好きって伝えたはずだけれど

どうしてあなたが気になるんだろう
冷たい一番星
キライだった
一番星

でも一番
今は思い焦がれている

複雑な心

感情に正直に

自分に素敵に生きよう
そう思った
随分と急な心変わり
やっぱりあなたが気になるから
自分に正直に生きよう
そう思った

素直になっただけ
そう言う私に
世間は驚く
好きなら　好きって
はっきりしただけだけれど
それはまるで
浮気みたいに扱われる

不謹慎じゃないわ
真面目な話
笑わないで
真剣なの

摘み食いみたいに
好き　嫌い
振り分けた日もあるけれど
今は違う

思い焦がれて
自分磨きに精一杯頑張って
素敵に生きるんだって
素直に生きるんだって
友人の励ましと
周りの少しの干渉
もう平気
気にならないから

自分に素直になって生きるのは
きっと素敵なこと

一度っきりの人生だもの

ありがとう

ありがとう
ありがとう
素敵な人
あなたの両手に包まれた瞬間
私はとても幸せでした

ありがとう
ありがとう
また一緒に頑張ろう
あなたの励ましが
私を支えてくれました

日々いっぱいの出会いで
あなたを好きになって
本当によかったと思う

最後まで言葉の
美しいあなた
優しい文面に
そっと頬もゆるむ
あなたの優しさは
とても美しくて
温かい
とても居心地の良い

情なのね

気遣いのできる
広いあなた
少し間違った言葉に
珍しくって笑ってしまう
それも許せるなんて
きっとあなたは
特別なのね

ありがとう
ありがとう
あなたに満たされていた時間
とても幸せでした

かさかさ

風も冷たくなって
乾いた手に
冬を知らせる
冷たくなってきた風が
ひどくしみる
痛いわけじゃないけれど
意味もなく
両手を擦り合わせてみる

手の肉刺(まめ)が擦れて
かさかさする
治らない肉刺(まめ)はずっと
当たり前のように
私の手にある
意味もなく
存在感を解き放って

そうして温かみのなくなった
左腕に
温かい記憶を思い出して
少し幸せになる

温かい人の温かい腕
自然に組んでいると

不思議と
幸せな気分になれる
満たされた気分になれる

これはきっと満足感
温かな幸せ
かさかさの手を気にせずに
左腕で感じられる
幸福感

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7356x/

【詩集】枯れすすき

2011年10月28日06時11分発行